

東神電池工業株式会社 代表取締役社長 永井 忠弘 氏



永井靖彦会長(中央左)、永井忠弘社長(中央右)
筑波銀行 水戸駅南支店 長岡支店長(右)、聞き手・野口稔夫

茨城県水戸市に本社を置く東神電池工業株式会社は、1950年に設立し、長年、バッテリーや産業用蓄電池などの納入・施工を一手に引き受ける“茨城県内の電気設備施工のパイオニア”として、社会に貢献してきました。

2012年、先代から経営を引き継ぎ、同社の3代目として代表取締役社長に就任した永井忠弘氏は、「人の喜び」こそ、事業発展の活力であると指摘しています。

今後、同社は、長年培ってきた電気設備施工の高い技術力と新事業「LINE-X」、そして、柔軟な発想力と機動力を掛け合わせ、次代に通用する「総合電機会社」へと昇華していくことを目指しています。

インタビュー日：2020年7月16日
(聞き手：筑波総研(株) 取締役社長 野口稔夫)
(文・写真：筑波総研(株) 主任研究員 富山かなえ)

企業概要

本 社：茨城県水戸市城東1-4-4
 事 業 所：東京事業所(東京都中央区東日本橋3-7-19 友泉東日本橋駅前ビル8階)
 営 業 所：宇都宮営業所(栃木県宇都宮市城南1-1-4)
 設 立：1950年5月20日
 事業内容：電源システム事業
 (産業用蓄電池などの販売、設計・施工、保守整備)
 自動車電装事業
 (自動車用バッテリーなどの販売、取付、修理)
 LINE-X事業
 (特殊強化塗料「LINE-X」などの販売・施工)
 従業員数：70名
 会社HP：<http://toshin-fx.co.jp/>

御社創業の歴史や事業概要についてお聞かせください。

戦後の混乱を乗り越えた祖父の技術が出発点

当社創業の歴史は、祖父の弘が自動車のバッテリーや電装品の修理業を始めた1948年まで遡ります。祖父は疎開の地であった水戸市で戦後の混乱を乗り越え、自宅を兼ねた小さな修理工場から出発し、2年後に当社を設立しました。

祖父は順調に事業を拡大し、1953年には現在の東京事業所の基礎となる東京支店を開設しました。その後、東京電力(株)をはじめ、日本原子力研究所(現国立研究開発法人日本原子力研究開発機構)や動力炉・核燃料開発事業団(同)など、大手企業などとの取引を広げてきました。

1971年には、日本電池(株)(現ジーエス・ユアサコーポレーション)の代理店に登録、現在まで同社との良い信頼関係を保ち続けています。

祖父は長年、自分が若い頃に技術習得でお世話になった東京や神戸の工場の方々への恩義を忘れなかったと聞いています。その感謝の想いは、当社の社名「東神」にも表れています。

堅実な経営を引き継いだ3代目としての覚悟

現在、当社は3つの事業を柱に据えています。売上の9割以上を占める「電源システム事業」、創業当時の技術を伝承・発展させた「自動車電装事業」、そして、新事業の「LINE-X事業」です。

瞬時の停電や予測不能な災害などによって引き起こされるシステム障害は、企業にとって大きな損失になります。当社は、そのような被害を最小限に抑えるために、産業用蓄電池や無停電電源装置(UPS)などの納入・施工を一手に引き受ける“茨城県内の電気設備施工のパイオニア”として、社会に貢献して参りました。

現在、世に出回っている蓄電池は、これ以上の改良は難しいと言われてしています。しかし、将来、誰かが画期的な蓄電池を開発した場合、1人勝ちになることは明らかです。そのような事態に備えるためにも、私は、常に視座を高く保ち続けることを自分に課しています。

また、3代目として、先代たちから引き継いだ堅実な経営、そして、お客様からの信頼と信用を守り抜く覚悟しております。



福祉車両用品の取り付けを行う自動車電装整備士(中央)

家業を継承すると決意した経緯や大切にされている想いについてお聞かせください。

「帰らへん」を一変させた母の涙

私は自動車専門学校を卒業後、日本電池(株)に入社し、大阪支社に配属されました。しかし、若気の至りで上司と対立して半年で退社、その後3年間、フリーターのような生活を送っていました。

「この地で骨を埋めたい」と思うほど大阪の水は私に合い、茨城に戻るという選択肢はありませんでした。そんな時、母が急に家を訪ねてきたのです。

戻って来る気はないのかと聞かれ、私は「帰らへん。一生、大阪に住むわ」と素っ気ない返事をしました。しかし、それを聞いた母が「お父さん、悲しむわね…」と大粒の涙を流したのです。

当時の私は、家業を継ぐ気は一切ありませんでした。それは父との不仲も要因の一つでした。しかしそれ以上に、涙を流す母の姿は私の心を打ち、当社への入社を決意させました。

入社後、父と意見がぶつかって一時的に解雇された経験もありますが、私は常に現場の最前線に立ち、技術や接客を一から学んでいきました。



本社外観

「人の喜び」こそ、事業発展の活力

2012年、私は先代から経営を引き継ぎ、代表取締役社長に就任しました。前年に東日本大震災が起こるなど、大変な時期での事業承継でしたが、耐震基準を満たさなかった旧本社を移転し、現在の地に新社屋を建造したことで、新たな気持ちでスタートを切ることができました。

また、私は、先代が作り上げた経営理念の4項目を基本に、より分かりやすい言葉で表現した「基本的価値観」を新たに掲げました。

— 経営理念 —

1. 自己の職業並びに他の職業もこれを尊重し、誇りを持って発展させる
2. 企業の倫理的な規範や国、地域社会の法律や道徳的な基準を遵守する
3. 企業の品位を保ち、自ら選んだ職業において社会的責任を果たす
4. 雇主、従業員、同僚、同業者、顧客その他事業または職業上関連するすべての人々に対し、等しく公正にする

— 基本的価値観 —

人の喜び	仲間の喜ぶ姿、顧客の喜ぶ姿、地域社会の喜ぶ姿、家族の喜ぶ姿
環境整備	社員が顧客の事を第一に考えられるような環境をつくる
技術改善	すべての電気技術に対する飽くなき研究心、探究心を持ち、これを習得し社会に提供する
利他	仲間へ、顧客へ、社会へ、家族へ、尽くす
強い心	仲間への叱咤激励、毅然姿勢、家族を守る
顧客優先	顧客のメリットを中心とした発想で考えられる組織
やさしさ	仲間への思いやりと気遣い、顧客への思いやりと気遣い、社会への思いやりと気遣い、家族への思いやりと気遣い
優勝劣敗	同業者同士、協調・協力しあってメーカー市場(占有率)を守ると共に、他の業種、業界であっても最大限の努力を惜しまず更なる信頼向上に努める

東神電池工業(株)の経営理念(上)と基本的価値観(下)

入社から約20年間、現場に立ち続けた私が、基本的価値観の中で最も重要だと感じ、事業発展の活力と捉えているのは、「人の喜び」です。

お客様の喜ぶ姿に心から感激したのは、以前、当社が加盟していたフランチャイズの自動車用品販売店の店長として勤務していた時でした。



「基本的価値観」に込めた想いを語る永井社長(中央)

お客様から「店長ありがとう！」と満面の笑顔を向けて頂いた体験は、何ものにも代えがたい素晴らしいものでした。これは、お客様の対象が、個人から企業になろうと変わりはありません。基本的価値観は私たちの心の拠り所であり、当社の経営判断の基準になっています。

また、私は社員に対して「会社のために頑張ってもらいたい」と伝えたことは一度もありません。価値観は人それぞれであり、社員の自己実現が最も優先されるべきです。それが結果として会社への貢献になれば、なお良いと考えています。

社員の中には、自己実現のために転職を選択する者もいます。今まで一緒に働いてきた仲間が退職するのはとても辛いですが、転職先で「さすが東神電池工業で働いていた人だ」と称賛されるくらい、技術力、そして、人間力向上のために、日々、自己研鑽に勤しんでほしいと願っています。

「LINE-X(ラインエックス)事業」の立ち上げ経緯や魅力についてお聞かせください。

【気軽にアイデアを出し合える「新規事業委員会」】

2017年、当社は「LINE-X事業」を新たに立ち上げました。私は「仮に失敗しても、会社が大きく傾くほどの大きな影響が無いと見込めれば、積極的に新事業へ投資しても良い」と考えています。

LINE-X事業のアイデアは、月に一度開催している「新規事業委員会」から誕生しました。同委員会は、社員がフランクに話し合い、時に大笑いしながら、互いのアイデアを高める機会です。

同事業も、同委員会に参加した社員が、「特殊強化塗料の『LINE-X』って知ってますか？」という何気ない言葉から始まりました。

アメリカ政府お墨付きの高性能塗料

「LINE-X」は、高純度ポリウレアを主成分とする画期的なコーティング剤と言われ、その性能は、耐衝撃、耐爆破、防錆、防蝕、防音、耐摩耗性、真菌繁殖抑制など多岐にわたります。

もともとは、テロ対策として開発され、現在、アメリカ政府の重要施設などで採用されています。これまで、建物が爆撃を受けた際、その破片が飛散することで、多くの命が奪われていました。

しかし、LINE-Xを塗装した部分は、破碎を避けることができるため、飛散物による人的被害を最小限に抑えることが可能になりました。



LINE-Xを吹き付けた卵(右下)は、強い衝撃を与えても割れず、紙コップ(右)をどんなに押し潰しても、強力な形状記憶機能により、元の形に戻る

「これは面白い!」。そう直感が働いた私は、即座にLINE-X事業の立ち上げを決意し、関東地区で唯一の代理店として出発しました。

大企業の場合、事業計画を立て、様々な段階を踏んで新事業に着手しますが、当社のような中小企業は、俊敏な機動力こそが経営の武器です。

JR東日本などからの受注、新事業に手応え

LINE-Xは、金属やコンクリート、アルミ、樹脂、木材、地面などに吹き付けが可能です。VOC(有機化合物)が発生せず安全性も高いため、貯水タンクや病院、食品加工施設などにも使用できます。また、塗膜の経年劣化も他製品と比べ極めて遅く、20年以上の耐久性を誇ります。

当社では、吹き付けの訓練を受け、認定証を取得した技術者だけが施工を行う体制を整えています。これまでに、JR東日本管内の線路の防水改良工事や高速道路トンネルのはく落防止工事などを請け負ったほか、現在も様々なお問い合わせを頂いており、強い手応えを感じています。



LINE-X吹き付け塗装用具について説明する永井社長(中央)

今後の事業展望についてお聞かせください。

多様な要望に応える「総合電機会社」を目指す

当社は、電源システム事業という大きな軸を柱に据え、70年間の道のりを歩んで参りましたが、私は、先代たちから受け継いだ堅実な事業経営を基盤に、当社を次代に通用する「総合電機会社」へと昇華させたいという強い想いがあります。

今般の新型コロナウイルス感染症の拡大により、今後、事業所の環境改善策に向けた換気設備設置など、新たな需要が生まれると予想しています。

当社は、長年培ってきた電気設備施工の技術とLINE-X、そして、当社の柔軟な発想力と機動力を掛け合わせ、建築・土木工事をはじめ、環境改善工事など多様な要望にお応えする「ワンストップチャンネル」へと成長したいと考えています。

今後、日本だけでなく、世界のカルチャーは、180度転換していくでしょう。不安もありますが、信頼できる社員とともに、邁進し続けて参ります。



永井社長(右から2番目)とLINE-X事業部の皆さん

この度は、長時間にわたり貴重なお話をお聞かせいただき、誠にありがとうございました。御社の今後益々のご発展をご祈念いたします。